

基生研と生理研への感謝の思い出

大阪大学大学院生命機能研究科教授

村 上 富士夫

私は 1998 年より、基礎生物学研究所の客員部門（行動制御部門）を担当し、基生研で 5 年間お世話になりました。またその 10 年前の 1978 年には生理学研究所の客員部門の助手として岡崎に赴任し、5 年半に亘って勤務をしました。この手記はその当時の思い出を中心に執筆しています。しかしながら、この手記は勿論生理研ではなく「基生研」の思い出として執筆しています。それは 2 つの研究所は生物科学総合研究機構の下に双子のような研究所として誕生し、設立当初の両研究所は一つの研究所のようだったからです。ですから所属がどちらの研究所であったとしてもほとんど関係が無いと思っています。

設立当初は基生研と生理研には物理的にも境目はありませんでした。即ち以前愛知教育大学の図書館だった「仮庁舎」と呼ばれる建物に 2 つの研究所は同居していました。全体の人数が少なかったこともあり、一つの部屋に集まって昼食を摂ったり、共にスポーツ（写真）や旅行をしたりして常に一体感が感じられる雰囲気でした。

1979 年 3 月に基生研の建物の一部が先に完成しました。それに伴い、生理研のメンバーの一部も基生研の建物に移ることになりました。私の所属していた客員部門は仮庁舎住まいの時は 20 平米程度のスペースしかありませんでしたが、それが 100 平米強に拡大し、研究を本格的に始めることができるようになりました。機構全体の面積も大きく拡大しましたが、2 つの研究所が 1 つの建物に共存するというパターンは変わりませんでしたので、一体感はそのまま維持されました。研究所の受付には両研究所の事務員のお嬢さんが一緒に詰めて協力しあいながら仕事を進めておられました。4 階の図書室（現在の情報研修室）は皆が集まって昼食を摂る場となりました。その場には技官から教授まで様々な立場の人が集まりました、研究の話題からピンクレディーの話まで様々な話がでましたが、その話題の中で記憶に残っているのは「基生研や生理研のような新しい組織をつくと新たな活力が得られるが大抵の場合、設立後 10 年位がピークでその後は衰退していくものだ。」という議論でした。創立 30 周年目を迎えた両研究所がそのような例に当てはまることなく、活力を維持するばかりが発展を続けていることは大変素晴らしいことだと思います。

客員部門の様子は現在とは大分異なっておりました。当初は客員の教授と助教授のほか基生研が常勤の助手 2 名、生理研が助手 1 名と技官 1 名によって構成されていました。研究室の責任者である教授は一月に一回程度しか来所しませんので、それまで大阪大学の研究室で助手をしていた私にとって、大変大きな環境の変化でした。教授が不在であるために十分な情報が伝わってこないなどの不便さはありましたが、上司のから常に監視されることなく自由に研究出来たことは素晴らしい経験でし

た。そのお陰で、(隠れて)新しい分野への挑戦をすることもでき、それはその後の研究の発展につながりました。また自分の研究室には人が少ないため、自ずと人との交流を求めて他の研究室に入り込んで行きました。特に同じ境遇におかれている助手が在籍し、普段は教授のいない他の客員研究室は敷居が低かったため、当時の岡田研の石浦さん(現名大理学研究科教授)や、太田研の近藤さん(現名大理学研究科長)のところへはしょっちゅう出入りをしていました。そうした中で基生研の仲間から受けた影響はその後の研究の方向性を決める際大きな影響があったように思います。

基生研の建物に間借りしている間に、生理研の建物や実験室の設計が始まりました。そして1980年春、ついに生理研の建物が完成し、移転することになりました。しかし、両研究所の建物を設計された山岸俊一先生と金谷晴夫先生のお陰と思いますが、両研究所は地下道で結ばれました。ですから、研究室が別の建物に移ってからもそれまでと変わることなく基生研に出入りをさせてもらいました。

基生研の客員部門を担当するようになって、岡崎に戻ってきたときには両研究所ともその規模が大きくなり、スタッフの人数も随分増え、両研究所の発展の様子を肌で感じました。ひとつ残念に思えたのは、2つの研究所の距離が離れたように感じたことです。素晴らしいものがひとつ失われたような気がしました。しかしそれは規模の拡大の代償として仕方のないことも知れません。基生研に感謝すると共に、基生研がこれからも発展し続けることを心から願っています。

